

筑波大学で社会科教育を学ぶということ

唐木清志

人間総合科学研究科講師

1. 「社会科教育」って何？

「あなたの専門は？」と聞かれたら、私は「社会科教育です」と答える。しかし、この答え方で、即座に「ああそうですか」と納得してくれる人は少ない。教育関係者ならまだしも、それ以外の専門をお持ちの方にはもう少し説明が必要である。（詳しい説明をしても、未だに理解してくれない私の両親のような人もいる。）

社会科教育とは、学校の「社会科」という教科がどういう構造になっていて、どういう歴史を辿っており、あるいは、どう教えることが望ましいかを研究する学問である。最近では、学校カリキュラムの再編の動きにともなって、「社会科」の他に、「生活科」「地理歴史科」「公民科」、さらには「総合的な学習の時間」までも研究対象としなければならなくなった。「教科教育学」の領域では、「何でも屋」が社会科教育の別名となっている。

2. 筑波大学社会科教育学研究室の伝統

筑波大学は、「社会科教育」では伝統のある大学である。かつては、筑波大学と広島大学の2大学のみが、大学院博士課程に「社会科教育コース」を有していた。このコースを巣立った私の多くの先輩が、現在の日本の社会科教育研究をリードしている。いわゆる、社会科教育研究の領域では、筑波大学は「老舗中の老舗」である。

そのような歴史的経緯もあり、わが研究室では「日本社会科教育学会」の事務局を数回にわたって担当してきた。現在も、事務局は筑波大学にある。また、毎年の秋に開催される「全国研究大会」も、第40回・50回といった節目に当たる記念大会は、筑波大学で開催されることになっている。さらに、10年に1度、その「全国研究大会」に合わせて刊行される「社会科教育文献目録」も、伝統的にわが研究室が編集責任大学となってきた。つまり、「全国研究大会」と「文

献目録」が重なる10年に1度の年は、筑波大学社会科教育学研究室にとって「大変な年」となるわけである。

日本社会科教育学会の事務局は、研究室教員が博士課程の院生と協力しながら運営している。これとは別に、修士課程・教育研究科(社会科教育コース)のOB・OG組織として「筑波大学社会科教育学会」がある。現在在学中のMCの1年生が第25期で、同期の学生が25名程度いるので、今までに700名を超える学生が修了していったことになる。修了生の中には、地方の教育行政の要職に就いている者、さらには大学で教鞭を執っている者など、社会科教育研究のリーダーとして活躍している者も少なくない。このような修了生の同窓会組織が「筑波社会科教育学会」であり、その研究成果をまとめたものが学会誌『筑波社会科研究』である。下の写真は、『筑波社会科研究』と、日本社会科教育学会の学会誌『社会科教育

研究』を並べたものである。両学会誌には、貴重な論文が数多く含まれている。

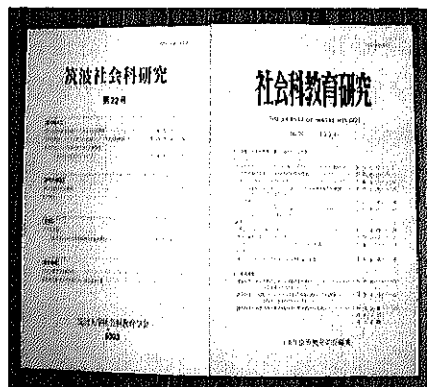
「筑波社会科教育学会」は現在、学問的なレベルアップを目指して、その組織運営を検討中である。近い内にリニューアルされた学会が誕生するものと思われる。

3. 授業の工夫

ここからは、私見である。

私は、学生(大学院生・学類生)に「社会科授業を開発する技術」を身につけて欲しいと願っている。MCの学生には教員となった時にその技術が役立つように、DCの学生には教職の講義を大学で担当した時にそれが役立つように、さらに、学類生には、その学習を通して、社会科教育の面白さを体感できるように、という思いからである。そのために、私は授業の工夫には人一倍気を遣っているつもりである。ここでは、来年度の授業計画を紹介する。

まずは、修士課程・教育研究科(社会科教育コース)の授業「公民教育論」(通年)に関して。この授業では、来年度は「ホームレス問題」に焦点を合わせ、その教材化を参加者全員で考えていくつもりである。私はここ数年、同僚が運営するホームレス支援グループの活動に参加してきた。(私は昨年3月まで「静岡大学教育学部」に所属しており、この活動参加はその時のもの



である。)その経験や、そこでできたネットワークを生かして、筑波大学の授業においても「ホームレス問題」の教材化に挑戦することにした。現時点では構想段階で、あまりはつきりしたことは言えないのだが、次の3つのことを授業の中で実践したいと考えている。第一は、「ホームレス問題」に関するパンフレット作り。中学生が社会科の時間にわかりやすくホームレス問題を理解できるように、そのための補助教材を作成するつもりである。第二に、パンフレット作成のために、学生を連れて東京のホームレス支援に関するNPOを訪問し、実際にそのスタッフと一緒に「ホームレス支援活動」を実施する。これは、一種の巡検になるのであろう。さらに、それらの活動に基づいて教材開発を行い、附属中学校か附属高校で授業をすることを計画している。

次は、学類の授業「社会認識教育論」に関して。この授業の来年度のテーマは、「つくばTX」である。今年の秋に開通予定の「つくばTX」が学生にとっても関心事の1つであり、学生の学習意欲も高まることを期待してテーマに設定した。授業では、アクションリサーチの手法を用いて、「つくばTX」の誕生にともなって生じるであろう地域の社会問題を、学生が調査・分析・解決していくことを目標にする。授業の最終的なゴールは、小中高の総合的学習において、

このようなアクションリサーチに基づく授業が有効であることを、学生が体験的に理解することにある。この授業では、今年度、学生に「子ども」「障害者」「老人」の福祉に関する3つの領域の中から1つを選択させ、その領域のプロから様々な話を聞くという授業を展開した。この授業の経験から、学生が地域社会に積極的に参加する意欲と能力があることがわかった。そこから、「つくばTX」に関する授業を、来年度、構想したわけである。どんな授業になるか、今から楽しみである。

4. 学生に望むこと

私は、学生に、「現地に行って、自分の目で確かめることの大切さ」を繰り返し伝えてきた。授業をうまくやりたいなら、授業を数多く見る必要がある。関心のある社会問題を調べたいなら、実際にそこに足を運んでみることである。そのような考え方は、研究室の運営にも少しずつであるが影響を及ぼしているようである。「今、学生に望むこと」は、自らの力で自らの生き方を切り拓いていく力を付けることである。それは、「社会科教育の精神」でもある。

(からき きよし/社会科教育学)